



原爆の図丸木美術館 開館 50 年—基金調達運動の立ち上げ



丸木伊里・俊の原爆の図の一つ（丸木美術館所蔵）

埼玉県東松山市の原爆の図丸木美術館は、広島・長崎の原爆の恐怖を描いた、世界的に重要な作品を所蔵しています。美術館は丸木位里・俊夫妻が、原爆投下後まもなく被爆者から聞き取って描いた絵画を展示するため、1967年に建てたのでした。15点の一連の作品の内、14作品は展示されていますが、長崎の惨状を描いた図は、長崎原爆資料館に寄贈されています。美術館には、南京大虐殺、現ポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所、水俣の水銀中毒の悲劇を描いた作品もあります。沖縄戦の恐怖を描いた図は、沖縄の佐喜眞美術館に贈られています。

5月5日、丸木美術館開館50周年を機に基金募集を始めましたが、数年のうちに5億円（約5百万ドル）募ることを目標とし

ています。世界遺産の有力候補である比類ない作品を、理想的な状態で保存し展示するため、最新の温湿度管理装置を備えた新館設立を目指しています。また、丸木夫妻に関する著作や書簡などの資料を収集し、作品理解に役立つアーカイブ整備をする計画もあります。美術館は創立以来、自立を守るために、行政の助成金や企業献金に頼らずに運営されてきました。

ゴヤやピカソの反戦作品と同様に、丸木位里・俊の作品は印象的ですが、加えて、原爆のすさまじい破壊力を描いていて、核時代戦争の本質を人々に思い起こさせる重要な役割を担っています。また、核戦争を防ぐために世界的核廃絶が緊急に必要なことを、訴える力を持っています。美術館の基金運動が成功し、東京から遠くない

埼玉の、新丸木美術館によって、広島・長崎の被爆者の悲痛な願いが、さらに聞き届けられることが強く望まれます。



丸木位里・俊（丸木美術館所蔵）

基金に関しては

www.aya.or.jp/~marukimns/english/fund_eng.html

朝日新聞の記事は

www.asahi.com/ajw/articles/AJ201704170057.html

ジャパン・タイムズの記事は

www.japantimes.co.jp/news/2017/04/30/national/famed-saitama-art-gallery-kicks-off-fundraising-campaign-to-preserve-hiroshima-panels#.WQaCulVOL4

読売新聞の記事は

<https://motto.media/2017/05/04/help-sought-for-damaged-a-bomb-artworks>

（寺沢京子訳）

カリフォルニア州サンタモニカー平和・軍縮のための「連鎖反応」像再除幕式

6月26日、サンタモニカ・シビックセンターで、原爆のきのこ雲を描いた8メートル（26フィート）の、平和と警告のための像「連鎖反応」再除幕式が行なわれました。像は、アーティストのポール・コンラッド（Paul Conrad, 1924-2010）が1988年に構想し、平和慈善家で後援者、核廃絶の活動家でもあるジョアン・クロク（Joan Kroc）から、

250,000ドルの寄付を得て創られました。サンタモニカが、論争になり得るその像を受け入れることを決めた後、1991年にサンタモニカ・シビックセンターの芝生の上に据え付けられることになったものです。

2012年に市の芸術委員会は、構造的な安全性に疑問があるということ、再建に十分な資金がないとのことで、その像の撤去を薦めました。しかし、活動家のジェリー&マリッサ・ルビン（Jerry and Marissa Rubin）が率先して100,000ドルを集めることに成功し、市が修復費の残りを出すことになりました。いま「連鎖反応」像は美しい「ピース・ガーデン」に囲まれて、日没後はソーラー発電による灯で照らされています。

式には、現市長と前市長、市職員、地域活動家、コンラッドの家族などが参加しました。コンラッドの誕生日の前日でした。像は「核戦争への現存する危険への強い警告」として受け止められています。コンラッドは政治風刺画でピューリツァー賞を3度受けていますが、核戦争への警告というテーマで、初めはデンバー・ポスト（Denver Post）、その後数十年は、ロサンジェルス・タイムズ（Los Angeles Times）に発表してきたのです。記念式前の週、スーザン・アイヴズ（Susan Ives）は「連鎖反応」像を「月曜日の像」（Monday's Monument）に選びました。彼女は講演者、ワークショップ指導者、編集者であり、テキサスのサン・アントニオピースセンター（SAPC）のHP管理の仕事もしています。



「連鎖反応」像

2015年5月4日からSAPCのHPで、毎週曜日に平和の像を掲示していて、コンラッド

ドの作品は 113 回目の「月曜日の像」になったのです。短文と共にネットで見るができます。

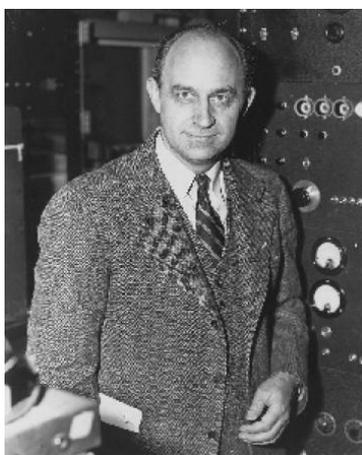
www.sanantoniopeace.center/peace-and-justice-monuments/

エドワード・テッド・ロリス(Edward Ted Lolli)は、全ての像のリストを作成しています。

http://peace.maripo.com/p_san_antonio_peace_center.htm

今から 72 年前の 1942 年 12 月 2 日、エンリコ・フェルミ(Enrico Fermi)率いるシカゴ大学の科学者たちが初めて、核の連鎖反応の制御を達成し、そこから核の時代に入ったのです。歴史的な重要性に鑑みて、大学では 2017 年 9 月から一連の公の行事を催しています。講演、議論、シンポジウムに加えて、「芸術と核時代」に関する発表や展示もあります。「核連鎖反応」記念プログラムの全日程は、次のサイトで見るができます。

http://peace.maripo.com/p_san_antonio_peace_center.htm



エンリコ・フェルミ
(寺沢京子訳)

テヘラン平和博物館

エラヘ・プーヤンデー

1980 年代のイラン・イラク戦争の間に、3000 トン以上の様々な化学物質がイランに

対して使用されました。今日でもまだ 65,000 人以上のイラン人が化学兵器の長期的な影響により苦しんでいます。1987 年 6 月 28 日、イランの北西にあるサーダシュトの街が攻撃され、8000 人の市民がマスタードガスを浴びました。その攻撃から 30 年目にあたる今年、テヘラン平和博物館はその事件に関する行事を計画いたしました。

テヘラン平和博物館は、7 月 3 日に、化学兵器禁止機関 (OPCW) 事務局長であるアフメト・ウズムジュ大使のイランへの公式訪問中、その滞在の受け入れに尽力いたしました。大使は以前ハーグでの化学兵器禁止会議の開催期間中の締約国会議ですでに当博物館のスタッフに会われたことがありましたが、今回の訪問は更に当博物館の活動についてより詳しく知っていただく機会となりました。当館の活動について、ウズムジュ事務局長は「化学兵器のない世界を実現するために被害者の方々に私たちの活動に参加していただくことほど良い方法はありません。」と感想を述べられました。また、事務局長は化学兵器禁止機関からの表彰の大メダルをテヘラン平和博物館に授与されました。そしてテヘラン平和博物館の銘板をイラン人の化学兵器被害者から受け取られました。この授与式・贈呈式にはイランの核兵器禁止機関大使であるアリレザ・ジャハングリ博士、外務省の代表の皆様、サーダシュトとハラブジャの化学兵器の被害があった街からの代表団、テヘラン平和博物館のボランティアガイドの方々が来賓として参加されました。この行事の最後に、市立公園の平和広場にある慰霊碑に化学兵器によるすべての被害者のために献花が捧げられました。



ピースボートで

数日前の6月28日と29日に、テヘラン平和博物館は「平和のための集会」を開催いたしました。この集会のために、当博物館関係者、化学兵器による被害者とその家族150名が40台の車でテヘランからサーダシュトの街まで移動しました。この集会はその町の人々との団結を示し、大量破壊兵器の危険性に関する意識を高め、平和のメッセージを広めることを目的としていました。広島NPOである「モースト」の会員もこの会に参加してくれました。

5月にはテヘラン平和博物館の5人のボランティアガイドが、ピースボートに参加しました。化学兵器の被害者がこの船に乗るのは初めてでした。その航海中にボランティアガイドの方々は、広島と長崎の被爆者の方々に会いました。大量破壊兵器による被害を受けるという体験について個人的な体験を語り合い、すべての形の化学兵器・核兵器の廃絶が必要であるということと一緒に力説しました。ピースボートに乗船中、ボランティアガイドの方々はこの船の乗客に対して、イランに対する化学兵器使用やその個人的体験についてのプレゼンテーションもしました。そののちにスペインのバレンシア大学の行事がありました。その行事の中でイラン人の化学兵器攻撃を生き延びた方が化学兵器の使用に関する証言を行い、テヘラン平和博物館が、過去と向き合う方法の一つとして、平和文化の促進と啓発のための活動を実施していることを紹介しました。

5月にはテヘラン平和博物館は「私はこんなときに幸せです」というテーマによる子どもたちの絵の展示も開催しました。この展示に関するより詳しい情報は、当博物館の公式ウェブサイトをご参照ください。ウェブサイトには当博物館とアラメ・タバタベイ大学、ベルグホフ基金の協力提携に関する覚書についての情報も掲載されています。

<http://www.tehranpeacemuseum.org/index.php/en>



子どもたちの絵の展示

(赤松敦子訳)

紛争地帯の平和博物館

テヘラン平和博物館 国際関係担当
(2012-2016) ゴルメール・カザリ

2016年に私がカナダに移住した時、私は平和博物館について学び始めました。驚いたことに、カナダにはそのような博物館はないということがわかりました。6月25日に、カナダのブリティッシュ・コロンビア州立大学の地球的問題のためのリュー研究所の博士課程在籍者で、博物館教育者、学者であるキンバリー・ベイカーによるプレゼンテーションに参加させていただきました。彼女の話は彼女の論文と同じく「平和の羅針盤：紛争地域の平和博物館」という題でした。この行事はブリティッシュ・コロンビア州のリッチモンドにあるブリタニア造船所国立史跡で開催されました。まずスヌネイヌー(Snuneynuxw)とカウチャン(Cowichan)の先住民出身であるロベルタ・プライス長老による伝統的な祈りで会が始まりました。この祈りはカナダの西海岸の先住民である伝統的な海岸セイリッシュ部族の領地に客人を歓迎するときに捧げられるものでした。プライス長老はカナダの寄宿舎付き学校制度での体験と、いかにして彼女が先住民の長老たちの智慧と自分の地域共同体の無条件の愛に戻る方法を見つけたかを詳しく語ってくれました。

来賓演説者であるジャクソン・オケッチ氏は、南スーダンで少年兵として過ごした頃の自分の生活と、アフリカで今日まで続いている政府反逆者による子どもの誘拐について話してくれました。オケッチ氏は世界で最も紛争が多い地域に平和博物館が必要であること、子どもたちの命を救う必要性について主張していました。民族誌学者であるサルタン・ソムジー博士は自身の近く出版される著書『夢を見る人は預言者と呼ばれる』から一部を紹介してくれました。それは40年かけて研究してこられた先住民の文化的遺産を理解する長い旅についてのお話でした。後にそれが発展して、東アフリカで紛争が広がった時に平和構築の伝統を見つけることに繋がったそうです。

ついにその旅は紛争地域に平和博物館を創立するところまでたどり着くことになったのです。その博物館は、紛争を終わらせるために、草の根の市民社会を上げるための地元の知識や地域共同体をまとめいく技術を提供する場として作られたのです。

約40人の観衆がキンバリー氏の話に聞き入りました。彼女がどのようにこの課題に取り組むようになったのか、また、どのようにしてケニアの紛争地域で平和を構築する方法を探索することを始めるようになったのかについて話してくれました。



キンバリー・ベイカーとポコット族族長ジョセフ・アケノと平和スタッフ（撮影：マヌーヴ・マツィア）

彼女の平和を求める長い旅はカナダで始まり、次に日本の曹源寺へ、そしてマラウイの博物館、ケニアの聖なる平和の木の森、ケニアとソマリアの間の国境の紛争地域へと続いていきました。その過程で、彼女の個人的な平和の探索はより大きな地域共同体のための平和の探索へと変わっていきました。ソムジー博士の足跡を辿って、キンバリー氏は自分のフィールドワークをどの地域で実施したかを地図で示してくれました。その時、紛争地域を歩いて博物館の学芸員に会う旅のことも紹介されました。その時会った学芸員の1人、チェポティピン氏は16あるケニアの博物館の中でただ一人の女性の学芸員でした。不運なことにキンバリー氏は、チェポティピン氏の博物館が紛争の最中に焼かれてしまった後に、その博物館に到着したのです。キンバリー氏は、その時に博物館から助け出された平和関係の遺物のスライドを見せて、地域共同体平和博物館遺産財団がその失われた博物館を再建することをどのように誓ったかということをお話してくれました。



チェポティピン・アケノと救出されたポコットの遺物

彼女の素晴らしいプレゼンテーションの目的は、今日の世界で紛争に対する解決策を探し求めるということでした。その活動は、多様な先住民文化の智慧を活用し、地域共同体に根差している平和の遺産を探し求め、平和博物館を紛争解決の新しい道筋を創造することに従事させることによって紛争を解決するというを目指しているのです。キンバリー氏は、カナダで「地域共同体平和の木博物館」が文化的に多様な

理事会によって創立されるだろうというよいニュースも紹介してくれました。

(赤松敦子訳)

国際連合ジュネーブ事務局博物館

1946年に設立されて70年経つジュネーブの国連図書館内の国立博物館連盟は改装され、名称も変更されました。この博物館は国際連合ジュネーブ事務局が置かれているパレ・デ・ナシオンの中にあります。この堂々とした建物は1929年から1936年の間に国際連盟のために建設されました。その後この建物は、第二次世界大戦後に国際連盟が解散し、その後を継いだ国際連合のヨーロッパ事務局となりました。

国際連合ジュネーブ事務局博物館は2016年5月22日、国際博物館の日に再び開館されました。新しい常設展示「国際連盟から国際連合へ」では、来館者はコンピューターからの画像や音声によるメッセージに対して、マウスやキーボードで自分の選択を入力して操作を進めていくという双方向性スクリーンで展示を見ることができます。その内容はこの博物館の豊富な公文書から選び抜かれた展示物で構成されています。この展示では20世紀初頭以降の国際機関の発展について、特に国際連盟から国際連合への進化がテーマの一つとして扱われています。多国間外交、人権、難民保護、経済的・社会的発展、軍縮といった分野についてその進化がわかる展示となっています。

この博物館には特別展示室もあります。そこでは改装工事進行の様子、改装後の開館式、来館者の感想などがまとめられた12分のビデオが上映されています。このビデオは以下のYouTubeのサイトでも見ることができます。

<https://www.youtube.com/watch?v=DQFMM>
E1eNws



国際連合ジュネーブ事務局
パレ・デ・ナシオン

このビデオのナレーションは、主に公文書管理課主任であり、館長でもある Blandine Blukacz-Louisfert が担当しています。彼女の前任者であるウルスラ・マリア・ルーザー(Ursula-Maria Ruser)博士のご尽力により、『世界平和博物館要覧』がジュネーブの国連図書館によって出版されました。(1995年出版、第二版1998年)。

(赤松敦子訳)

イギリス、ブラッドフォード平和博物館 の新しい展示

平和博物館の多様な活動のなか、ここ数ヶ月は、新たな常設展と同時に、新たな企画展を組んでいます。「分割後の平和」展は、インドを分割する計画が、パキスタン(そして後にバングラデシュ)の独立となった70周年目を記念して、6月に始まりました。多くの流血や苦しみに至った重大な出来事による影響を受けた様々な個人の経験を記録するため、物語や記憶されるべき出来事は、特に地域のコミュニティから集められました。展示は、出来事の全ての過程を添えています。



「分割後の平和」展のロゴ

翌月は、新たな常設展「抗議！私たちの時代」の開催でした。それは、抗議、デモ、監視、良心的兵役拒否、積極的行動を通して、今日の平和のために運動している人たちの物語を語っています。展示は、近代の運動家たちの物語を語る新しい資料を含む7000点の平和博物館のコレクションの拡張を目的とする「現在の抗議：未来のためのコレクション」と名づけられた幅広いプロジェクトの一部です。



「抗議！私たちの時代」展

博物館の固有で貴重な資料の幾つかは、ロンドンでここ5カ月（3月～8月）の期間に開催されていた主な企画展「人びとの力：平和のための闘い」の一部であり、まさにロンドンから博物館へ返却されるどころです。

以前の通信に記載されているように、博物館は4月、ベルファストのINMP会議に向かう途中であった25人の海外からの訪問客（多くは日本ですが、イタリアやスペインからも）の団を迎えました。これは25年前に発足して以来、ブラッドフォードの平和博物館の館長、学芸員そして職員の最大の集まりでした。

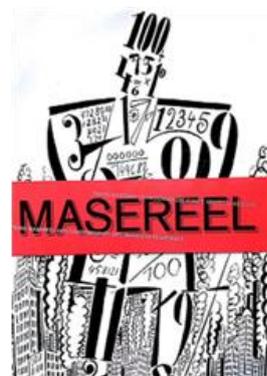


ブラッドフォード平和博物館における平和博物館代表の訪問者

(栗山究 訳)

フランス・マシリールの展示と常設絵画展：表象の中での抵抗

ベルギーのグラフィックデザイナーのフランス・マシリール（1889-1972）は、20世紀における反戦アーティストの最も傑出したうちの1人です。彼は、生涯にわたって社会不正義や過度な資本主義、さらに戦争に抗する絵を数え切れないほどの版画やエッチング、デッサン、漫画に描きました（また、後年には水彩絵の具や油で肖像画や景色を製作しました）。彼は、しばしば黒白の美的な対比の構成にし、それによって、鮮やかで忘れられないイメージをもたらしました。



展示カタログの表紙

彼の莫大なアートの選集である『フランス・マシリールと現代アート：表象の中での抵抗』は、ベルギーの海岸沿いにあるオステンドのミュージー芸術博物館で4月1日から9月3日まで開催されたメジャーな展覧会で展示されました。

第一次世界大戦中、マシリールはベルギーの軍人としての徴兵を回避するために、フランスそれからスイスへと避難しました。ジュネーブで彼は親友となったロマン・ローランの周辺の人々で構成された反戦の国際的な団体に参加したのです。戦争末期の3年間の間に、ユニークで勇敢な成果を挙げました。マシリールは平和主義の小規模な日刊新聞『ラフィール』のための漫画を生み出したのです。一方で、彼は赤十字の戦争捕虜国際組織でボランティアとしても

働きました。彼は、見聞きした戦争の脅威によって戦争とそれを生み出すものへの抵抗への思いが強まり、その生々しさを彼は描画で知らせることになりました。そこで彼は、教会、武器の売買者、無慈悲な資産家、軍部の共謀と有罪性を批判したのです。彼は、ナチズムやファシズムの台頭してきた 1930 年代、それから第二次世界大戦中も作品を書き続けました。

フランス・マシリエルの生涯にわたって生み出されたものは、装幀としての需要もあり、あらゆる種類の本に彼の版画が装飾されています。さらに、彼は現代 20 世紀における生活の様々な側面—都市、高層ビル、産業、ナイトライフ、音楽—に興味をかき立てられ、それはまた彼の才気ある芸術のテーマになりました。

マシリエルは、とりわけ戦争と社会不正義への抵抗の作品においてケーテ・コルヴィッツと共通点が多いです。どちらの芸術家の作品も、広く再生産され、メッセージが容易に理解出来るイメージを大衆へ与えることを目的としています。



「地面に何も捨てないで。ありがとう」

150 以上の彼の作品で構成される展覧会は、彼の生涯と作品の概観を紹介することを目的としています。それは、彼が 1937 年にパリで開催され（ピカソの大きく印象的な作品であるゲルニカも展示され）た世界展のために作られた（高さ 5 メートル、広

さ 7 メートルの）大きな壁に描かれた『戦争の喪』というタイトルの作品も含まれません。戦争は、顔にマスクをし、銃身が手足となった戦車が歩行する怪物に擬人化されています。それは聴衆の喝采に励まされ、棺に運ばれていくものです。この展覧会のタイトルが示唆しているように、今日あらゆる大陸で絶賛されている 10 人の現代芸術家の「抗議と抵抗の芸術作品」の展示を通して、マシリエルの政治的な関わりが今日対話を生み出しています。発行している出版物には、オランダ語と英語で対訳付きの 350 ページたっぷりに描かれた総合カタログがあります。詳しい情報は、以下を参照くれ。

www.muzee.beandwww.muzee.be/en/muzee/t207550/frans-masereel-and-contemporary-art-images-of-resistance.

（萩原達也 訳）

新企画展「良心の声：第一次世界大戦での平和の目撃者」

第一次世界大戦へのアメリカ合衆国の参加 100 周年は、様々な方法で記念されています。カンザスシティの第一次世界大戦博物館は、10 月 19 日から 22 日にかけて「消された声の記憶：今日に通じる第一次世界大戦における良心、異議、抵抗そして市民的自由」と題した大きなシンポジウムを開催しています。博物館では同時に「良心の声：第一次世界大戦での平和の目撃者」と題した新しい企画展を開催する予定です。それは、戦争へのアメリカの介入、徴兵制の制定、戦争に向かう流れ、そして諜報法や扇動法下での言論の自由の否定に抵抗した宗教の信者、宗教とは関係のない人道主義者、政治的な抵抗者たちを記憶しています。その多くは、戦争を推進しているアメリカ大衆の手による恥辱、監禁、集団暴行を受けました。展示では、戦争に反対して

抗議する人たちの未来を予見する見識や
個々人の勇気に光を当て、今日の世界にお
ける戦争と暴力の文化の類似性を提起して
います。

その展示は、9月10日に開始したカウフ
マン博物館の展示に基づいて、歴史家と博
物館専門家チームによって開発されました。
創設者であるチャールズ・カウフマンにち
なんで名づけられたこの博物館は、カンザ
ス州のノース・ニュートンにあるリベラル
アーツの単科大学にあり、北アメリカ最古
のメノナイト（キリスト教系の教派の一つ）
大学であるベテル大学に属しています。



この博物館では、1870年代と1880年代
にロシアからアメリカのセントラル・グレ
ート・プレーンズ（中央大平原）に数万の
メノナイトが到来し、大草原の環境とそこ
の人びととの出会いの物語が語られていま
す。メノナイト教会は、16世紀のヨーロッ
パ、特にドイツ、スイス、オランダにおけ
るプロテスタント宗教改革に起源をもっ
ています。イギリスで1世紀後に現れたク
エーカー教徒と同様、非暴力と平和的な社会
変革へのコミットメントは、メノナイトの
信念と実践の中心的な教義です。

この展示はまた、2018年を通して、例
えばインディアナ州のゴージェン大学やバー
ジニア州のハリソンバーグの東メノナイト
大学において出展される予定です。メノナ
イトの単科大学や総合大学は、平和学や紛
争解決学の典型的なプログラムを提供して
います。この展示の詳細な概要は、下記よ
りダウンロードできます。

<https://kauffman.bethelks.edu/Traveling%20Exhibits/Voices-of-Conscience/index.htm>

（栗山究 訳）

〈ポスター展示〉協力が導いた繁栄： 第二次世界大戦後のヨーロッパ復興 のためのマーシャル・プランポスター

アメリカ・オハイオ州のウィルミントン
大学内にあるクウェーカー歴史センターで、
力が導いた繁栄：第二次世界大戦後のヨー
ロッパ復興のためのマーシャル・プランの
ポスター展示」が行われています。
展示期間は2017年6月5日から12月8日
までです。展示会の特徴は、ヨーロッパの
マーシャル・プランが施行されていた時代
に現地で使用された25点の受賞ポスターの
オリジナルが展示される点です。1950年、
広報活動の一環として、欧州復興プログラ
ム（European Recovery Program（ERP）、
マーシャル・プランの正式名称）は、「よ
り良い生活のためのヨーロッパ内での協力」
というテーマの国際ポスターコンテストを
開催しました。このコンテストにはマーシ
ャル・プランに参加した13のヨーロッパ諸
国から、10,000を超える応募がありました。
審査では、ヨーロッパのグラフィックア
ート専門家、博物館のキュレーターなど
が選んだ受賞作品が選出され、マーシ
ャル・プランの広報のために各国メディア
へ掲載されました。



最優秀賞は、オランダのアーティスト、レイン・ディルクセン(Reijn Dirksen)氏のポスター「マストに我らのすべての国旗を(All Our Colors to the Mast)」に授与されました。受賞ポスターはこちらのサイトからご覧になれます。

<http://marshallfoundation.org/marshall/the-marshall-plan/marshall-plan-poster-contest/>

展示会の初日は、1947年に米国国務長官ジョージ・C・マーシャルがハーバード大学で、第二次世界大戦によって荒廃したヨーロッパへの復興に関して米国の果たす支援の緊急性と必要性について語った有名な演説から70周年の記念日でした。マーシャルは、「国や教義に反するのではなく、飢餓、貧困、絶望、混乱に対抗する」という方針を概説しました。同時に、この構想は欧州からもたらされ、協力的な取り組みに基づいているべきだと提案しました。彼の提案の結果施行されたマーシャル・プランは、西ヨーロッパ統一の前進に大きく貢献し、彼は1953年にノーベル平和賞を受賞しました。ノーベル賞受賞記念メダルは、マーシャルの死から5年後の1964年に開館したバージニア州レキシントンのマーシャル博物館に展示されています。

(山本桃子訳)

平和はどのように機能するのだろうか？ ドイツ、フランクフルトの美術館の企画展

ドイツ・フランクフルトのシルン美術館で2017年夏(7月1日～9月24日)に開催された企画展に、世界で活躍する12人の著名な現代アーティストが「平和はどのように機能するのだろうか？」という課題に取り組むために招かれました。平和は、人々の間だけでなく生態系に関わるすべての生き物の間において、物体としてというよりもむしろ相互作用とコミュニケーションのプロセスとして存在します。このアプローチは、人を中心に置く人間至上主義の世界観とは異なります。ここでは、水、植物、動物、無生物を含めた、環境に焦点を当てています。この展示会で発表された作品は、生態系の体系の再評価を主題にしています。

この展覧会の目的は、平和が何であるかについての省察を引き出すことでした。

展覧会の開幕に先立ち、シルン美術館は、上述のような平和の性質を最も反映した新しい平和ロゴのコンクールを開催しました。コンクールは、平和のロゴの探求、すなわちすべての州、性別、すべての人々、そして自然との平和を含む生物の間に平和が存在するユートピアを表すロゴを求めて実施されました。非常に身近な平和のモチーフである鳩は、キリスト教に根ざしているため、普遍的なシンボルとはみなされません。他の有名なシンボル、世界的な平和のシンボルとして知られているCND(核軍縮キャンペーン、イギリス)のシンボルや、壊れたライフル、花で飾られたライフル、結び目のある銃なども同様に、戦争との関連のためにふさわしくないと判断されました。受賞作品を含め、応募されたロゴの詳細については、こちらをご覧ください。

www.schirn.de/en/magazine/context/logo_winners/

また、展覧会の情報については、こちらをご覧ください。

www.schirn.de/en/magazine/context/peace_overview_show/

www.schirn.de/en/exhibitions/2017/peace/

(山本桃子訳)

2018年ドイツのミュンスターにおける 展示：昔から今日までの平和

400年前の30年戦争(1618-1648)の始まりを記念して、2018年にミュンスターにおいて重要な平和展示が取り組まれると最近報道されました。今日のドイツを中心にヨーロッパを破壊した戦争の結果、ミュンスター(そしてオスナブリュック)市における長引いた平和交渉後ヴェストファーレン条約が締結され、1648年に戦争が終わりました。その展示ではまた同時に、第一次世界大戦終結百周年記念も取り組みます。これらの二つの極めて重要な戦争(30年戦争の始まりと第一次世界大戦の終わり)を記念することで、2018年は平和について考える良い年となります。その展示の中心となるのは、

人々はいつも平和を願っているのに、なぜそれがうまくいかないのかという疑問です。2018年4月28日から9月2日まで開催される展示は、その年にある5つの機関の協力で実現します。つまり LML 芸術文化博物館、市立博物館、ピカソ芸術博物館、ヴェストファーリアン・ヴィルヘルムス大学考古学博物館、ムンスター教区です。各組織は、展示で独特な内容を担当します。古代から現代までのヨーロッパの平和に関連した身振りや儀式、平和のシンボルや象徴のようなテーマを説明するために、多くの展示品がおかれるでしょう。平和を築き維持するために様々な歴史的画期的な出来事において使った戦略や行動を説明するのに、歴史的な諸例が使われるでしょう。もう一つのテーマは、過去と現在の芸術による平和の表現となるでしょう。後者は、屋外に設置された美術品やビデオアートを含みます。展示ではまた、どのようにしてなぜ紛争当事者が平和の合意に達することができたのかという疑問に取り組むことでしょう。様々な紛争から引きだされた教訓、平和のきっかけとなったもの、交渉、協定のようない例が取り上げられるでしょう。

(山根和代訳)

あらゆる「平和のための博物館」における「恥ずべき人々の部屋」の提案

パキスタン・カラチ大学国際関係学部元学部長 サイード・シカンダー・メーディ

歴史上恥ずべき人々の部屋は、いつも展示物で満杯です。いまやそこはすし詰め状態のようです。第二次世界大戦後、特にアフリカ、アジア、ラテンアメリカでは、新しい悪者、本国の圧政者によって人々の命や知性が大量に殺され打ちのめされました。このような殺人者はこの「恥ずべき人々の部屋」の大部分を占めるのです。今日の圧政者を挙げると、たくさんいます。彼らの

多くはすでに権力はなく、国外に追放されていたり、亡くなっています。名前を挙げますと、チュニジアのザイン・アル＝アービディーン・ベン・アリー、ウガンダのイディ・アミン、エチオピアのメンギスツ・ハイレ・マリアム、ザイールのモブツ・セセ・セコ、リビアのムアンマル・アル＝カダフィー、エジプトのホスニー・ムバーラク、イラクのサダム・フセイン、トルコのジェマル・ギュルセル、ビルマ（今ではミャンマー）のネ・ウィン、韓国のパク・チョンヒ(朴正熙)、インドネシアのスハルト、イランのモハンマド・レザー・シャー・パフラヴィー、パキスタンのムハンマド・ジア＝ウル＝ハク、ハイチのフランソワ・デュヴァリエ、ニカラグアのアナスタシオ・ソモサ・デバイレ、アルゼンチンのホルヘ・ラファエル・ビデラ・レドンド、チリのアウグスト・ピノチェト、セルビアのスロボダン・ミロシェヴィッチなど、数多くいます。



サイード・シカンダー・メーディ

それから今日でもいくつかの国々で権力を持ち、人々を冷酷かつ野蛮に支配している人々がいます。いつか彼らも歴史における「恥ずべき人々の部屋」に入ることでしょう。独裁者や暴君は、彼らが支配している社会を混乱させ破壊し、そして盲目的愛国主義と軍国主義、さらに近隣に政治的宗教的倫理的な部族の過激主義を推し進めることを、歴史は示してきました。その結果、世界全体をかき乱し、不安定にする傾向もあります。このように権威主義は、地方で直すべき地方のガンと見なされるべきではありません。このガンは悪性で、体全体に影響を及ぼします。独裁者や暴君に対する戦いは、犠牲者のいる社会だけでなく、民主的で安全な所で快適に住むことができる社会でも行われるべきです。

平和のための博物館では今日疑いなく、素晴らしい仕事をしています。そこでは平和の展示が行われ、平和、自由、正義のための努力が示されています。多くのところでは、爆弾を禁止し、戦争を廃止し、女性や子ども、少数者や傷つきやすい人々への差別を止め、至る所で人権と自由を推進することに焦点を当てています。しかし平和のための博物館では、圧政的な支配の残忍性とこのような支配に対する闘いに焦点を当てる必要があります。今日世界の人々やその次の世代の人々には、過去、現在、そして未来の暴君や独裁者について知らせ、権利や自由がこっそりと奪われないように注意すべきことを知らせるべきです。従ってあらゆる平和のための博物館で、独裁者が支配する所での残忍な統治を強調したセクションを確保しておくことをお勧めします。このようなセクションでは、平和や正義に対する悪者の写真や経歴を示すこともできるでしょう。平和博物館におけるこのようなセクションは、「恥ずべき人々の部屋」ということができるでしょう。

(山根和代訳)

ハーグからのニュース

オランダのハーグ（国連の国際司法裁判所がある）の平和宮に沿った歩道が、ベンジャミン・フェレンツと名付けられました。彼は国際的な法律専門家として著名であり、世界平和の主張者でした。彼は 97 歳ですが、第二次世界大戦後開かれたニュルンベルク裁判でナチの戦争犯罪者に対する検察官ですが、生存している最後の検察官です。1947 年彼はナチ絶滅部隊（特別任務部隊）の問題では、アメリカの検察官代表でした。彼は長年世界の平和と正義のために働き、国際犯罪裁判所の概念を展開させるのに力を発揮しました。力による支配ではなく、法による支配を意味する「戦争ではなく、法律を」というモットーを彼は体現していると広範囲にわたって考えられています。その通りにある標識の除幕式が、5 月 15 日に行われ、フェレンツ氏、学童、ハーグ市議会議員、市長代理のサスキア・ブルーイ

ンズ氏が参加しました。非常に短いビデオを次のウェブサイトで見ることができます。
www.facebook.com/vredespaleis/videos/1431164923571570/

通りの標識は、平和宮の右側に沿った葉の生い茂った通りの幾つかの場所に設置されました。彼の多くの出版物や、「第二次世界大戦後 65 年：ニュルンベルク検察官の反省」と題した 1 時間の講演を含んだオーディオやビデオは、次のウェブサイトで見ることができます。

www.benferencz.org



ペトラ・ケプラー、クロイ・デュペロン（インターン）、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン

6 月に平和宮の訪問者センターは、5 周年記念を祝いました。お祭りの中では、庭園の見学、音楽を伴うピクニック、平和の鳩のコラージュや絵画の子どもコンテストがありました。

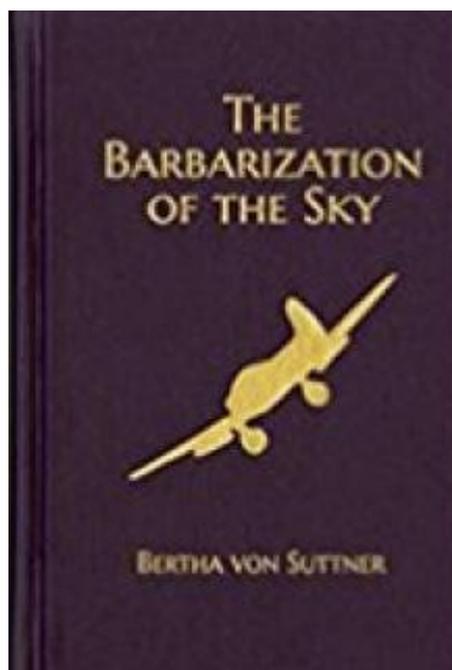


ベンジャミン・フェレンツ

過去 5 年間世界中から数えきれないほどの訪問者が、平和宮の魅力的な歴史を発見し、その中にある機関の働きや、それらがハーグを国際平和・正義の首都にしたことを学びました。



7 月 4 日平和宮図書館の歴史的なリーディンググループにおいて、ベルタ・フォン・ズットナーによるほとんど知られていないが重要な本の出版記念会が開かれました。彼女の予言的な評論である『空の野蛮化』の初めての英語版ですが、これはもともと 1912 年ドイツで出版されました。その他の言語に翻訳された唯一のものとして、糸井川修氏と中村実生氏による日本語版が、名古屋の愛知学院大学紀要(60—3 pp. 93-113 2013 年)に掲載されました。英語版の本において、その本の紹介をした図書館長のジェロエン・ヴェルヴリエト氏によって、約 50 名の参加者の前で本が紹介されました。その後オーストリア大使のハイデマリア・ゲレ、アメリカのホープ・エリザベス・メイ教授が挨拶をしました。メイ教授は、英訳プロジェクトをリードし、その本の編集をした方です。その本はミシガンセントラル大学のベルタ・フォン・ズットナープロジェクトによって出版され、テーマに関連した写真(いくつかはカラー写真)40 ページを含んでいます。



詳細は下記のウェブサイトをご覧ください。

www.berthavonsuttner.com ;
www.facebook.com/Bertha-von-Suttner-303353759785218/

(山根和代訳)



韓国における平和教育

国際平和ミュージアム専門委員
山根和代

平和アカデミーが韓国のノグンリ平和記念館と済州 4・3 平和記念館で、8 月 7 日から 12 日まで開催されました。10 か国の学生・大学院生 27 名が参加し、韓国の知られざる歴史と文化について学びました。朝鮮戦争中米軍によるノグンリ虐殺事件や、済州島での 4・3 虐殺事件(冷戦の始まる頃アメリカの反響政策のもとで多くの朝鮮人が 1948 年から虐殺された)などについて、講義がありました。学生はこのような悲劇

について、学校でもマスコミでも学ぶことがなく、このような隠された歴史について初めて学びました。



ノグンリ平和記念館における
ピースアカデミーの参加者

ノグンリで学生は市民が米軍に虐殺された現場のトンネルを初めて訪問しました。韓国へ行く前に立命館大学で映画の上映をしましたが、そこでは虐殺を想像することはできませんでした。しかし学生は虐殺の現場であるトンネルを訪問し、ノグンリ平和記念館でのチャン博士の説明を聞いて、歴史的真相を想像することができたと語っていました。学生は韓国の太鼓の演奏の仕方を学んだり、世界で最も大きい太鼓を見て楽しみました。また美しい景色のある場所や古いお寺などの訪問も楽しみました。

濟州島で学生は4・3虐殺事件について講義を聞き、また濟州4・3記念館の訪問をしました。彼らは第二次世界大戦後の韓国の歴史について学びました。また美しい観光地の訪問もしましたが、そこでは多くの人が虐殺をされたところでした。日本の学生はあまり近代史、特に日本の植民地主義や他国の侵略について学校で学びません。しかしノグンリと濟州島で過去、現在、そして未来において平和のために何をすべきで何ができるのかについて考えました。学生はピースアカデミーで友達ができ、ノグンリ平和財団と濟州4・8平和財団の温か

いもてなしとピースアカデミーの組織に対して感謝していました。



濟州4・3平和記念館での
ピースアカデミー参加者

APPRA 大会での平和教育パネル

立命館大学国際平和ミュージアム
専門委員 山根和代

アジア太平洋平和研究学会（APPRA: Asia Pacific Peace Research Association）が、8月23-25日にマレーシアで開催されました。「平和博物館を通じた平和教育」というパネルが開かれ、パネリストはクドー・チャン博士（ノグンリ平和記念館館長）、ユチャオ・ワン（南京大学ジョン・ラーベ記念館ボランティア）、アーマド・メリカン教授（マレーシア）、ロイ・タマシロ教授（アメリカのウェブスター大学、韓国の濟州4.3平和記念館について）、山根和代（日本の草の根の平和資料館の活動）でした。多くの参加者は今後平和博物館・植民地主義博物館を作ることに関心を持っていて、心強く思いました。



APPRA 大会参加者

マレーシアで最も印象に残ったことは、異なった文化や宗教であるにもかかわらず、仲良く暮らしていることでした。しかし日本の植民地主義や第二次世界大戦中日本の侵略で多くの人々が殺され苦しんだことについて日本人の訪問者が知ることは、容易なことではありませんでした。参加者は戦争博物館を訪問する時間はありませんでしたが、第二次世界大戦中日本軍に殺された兵士の墓地に行くことができました。参加者はその後平和公園を訪問し、植樹をすることができて良かったです。歓迎会では、四人の参加者が平和のための博物館について話しました。（第五福竜丸展示館について高原孝雄教授、川崎平和館の暉峻僚三氏、ロイ・タマシロ教授、国際平和ミュージアムの山根和代）

次の国際平和研究学会大会は 2018 年 12 月にインドで開催され、またアジア太平洋平和研究学会大会は 2019 年インドネシアで開催されるであろうと報告されました。APPRA 大会では、意見の交流やネットワークを作ることができ、平和研究と平和教育の推進にとって良い機会でした。この大会報告に基づいて、今後本の出版が計画されています。

日本の市民の運動により 朝鮮の詩人の石碑が建設される

立命館大学国際平和ミュージアム
安齋育郎

2017 年 10 月朝鮮人の詩人尹 東柱（ユンドンジュ）の石碑が宇治川のほとりに設置されました。尹 東柱は 1917 年に生まれ日本の植民地支配の下、ソウルで文学を学びました。1942 年来日して立教大学で文学を学び、その後同志社大学に移りました。しかし 1943 年 7 月 14 日に京都府警によって逮捕されました。1925 年政治活動を抑えるために制定された治安維持法に違反したという理由でした。その理由は、朝鮮の日本からの独立運動に関わったという根拠のないものでした。京都地裁により 2 年間の投獄が宣告され、福岡の刑務所に送られました。不明な薬物の注射により、1945 年 2 月

16 日彼が 27 歳の時に亡くなりました。尹 東柱が逮捕される前に友人と宇治川へハイキングに行き写真を撮りましたが、これが最後のものとなりました。



尹 東柱（中央）と彼の友人。
1943 年宇治川のほとりで

1948 年彼の詩集『空、風邪、星と詩』が韓国で出版され、その後日本語に翻訳され、世に知られるようになりました。

宇治の市民は 2005 年 9 月 11 日に尹 東柱の「新しい道」という詩の題を掘った記念碑を建設し始めました。そのため京都府との交渉、寄付金集め、講演会の開催など大変な努力をしました。記念碑建立委員会の代表には、立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長の安齋育郎教授がなりました。

2017 年 10 月に尹 東柱が最後に現れた場所に彼の記念碑がついに設置されました。記念碑の台座には、「記憶と和解の碑」と刻まれています。これは「第二次世界大戦中亡くなった人々の記憶と和解の時」と題した国連決議 56/26(2004 年 11 月)に沿うものです。この決議により、5 月 8 日と 9 日が記憶の日と設定されました。



尹 東柱の記念碑の前でテレビ取材を受ける
記念碑建設委員会事務局の紺谷 延子さん
(2017 年 10 月 4 日)

2メートルの記念碑は、朝鮮と日本を象徴した左右二つの石で構成され、その間に懸け橋となった尹 東柱を現した円筒の石があります。安齋育郎教授はテレビ局の取材で、この記念碑建設運動は、「地球規模で考え地域で行動しよう」という考えに基づいて、平和と相互理解のために活動する市民の典型的な活動です」と述べました。この記念碑建設委員会では、特に若い世代を巻き込んで「過去と誠実に向き合う」考えを広げるために、今後も様々な活動を計画しています。

(山根和代訳)

ICAN が 2017 年ノーベル 平和賞受賞

ノルウェーノーベル委員会は 2017 年ノーベル平和賞を、核兵器禁止条約の実現のために革新的努力をしてきた ICAN (核兵器廃絶国際キャンペーン) に授賞しました。ノーベル平和センターは、恒例のノーベル平和賞展示作成のために被爆者と国際平和博物館関係者と協力して制作を開始しました。この展示は 2017 年 12 月 11 日に公開の予定です。



編集後記

編集委員メンバーは安齋育郎、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、ロバート・コワルチェック、山根和代です。翻訳は、赤松敦子さん、栗山究さん、寺沢京子さん、萩原達也さん、山本桃子さん、そして山根和代がボランティアで担当しました。ありがとうございました。

INMP の会員そしてニューズレターの読者のみなさん、随時ニュースなどの投稿をお願いします。原稿は随時、英語で 500 単語以内、写真は 1-3 枚。あなたの名前と所属を書いて、

news@museumsforpeace.org

に送付してください。英語で書くことに困難がある場合には、INMP 日本事務局 (安齋科学・平和事務所、電話：075-465-8151 (水金午後)、FAX：075-465-7899) にご相談下さい。

次号の締切は、2017 年 11 月 15 日です。

「平和のための博物館国際ネットワーク」(International Network of Museums for Peace, INMP) に加わり、世界の平和博物館の連携を進めましょう

このニューズレターを年間 4 回発行している「平和のための博物館国際ネットワーク (INMP)」はすでに、1992 年の創設以来すでに 25 年の歴史をもっていますが、まだまだ発展途上にあります。日本の平和博物館関係者は、このネットワークの維持・発展に大きく貢献してきましたが、草創期をさらに成長期、発展期へと引き続ためには、引き続き日本の平和博物館関係者の積極的な参画が不可欠です。周りの方々にも紹介して頂き、関心をお持ちの方は、INMP 執行理事の山根和代 (16v00706@gst.ritsumei.ac.jp) または諮問委員の安齋育郎 (jsanzai@yahoo.co.jp) にご連絡ください。